

## 2 桜町・花畑周辺地区の歴史的経緯

### ①江戸期

#### 城下町として繁栄

加藤清正の熊本城築城前後に形成された城下町は、町全体が城の一部として扱われ、町の各所に御門や番所が配置されていた。また、人口過密な都市であったため、防火上の措置として、幅員のある広小路を設けるなど防災機能も充実していました。

なお、現在のシンボルロードは、かつての広小路の1つとされています。(図 2-1)



図 2-1. 文久 2(1805)年 熊本之図※2

#### 藩主の邸宅、政務の中心であった格式高い花畑屋敷

国許屋敷に定められ藩主の起居の場とされた花畑屋敷は、広大な敷地の中に能舞台※1を配し、敷地の南側に白川から水を引いた泉水と築山で構成された庭園が整備された格式と品格ある大名屋敷でした。

後に政務の中心の場となった屋敷の正門前の空間には参勤交代の際、藩主やその供をした人々の行列を送迎する場として機能しました。(図 2-2~6)

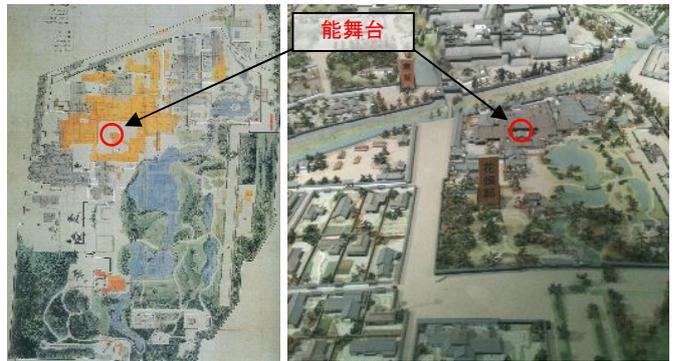


図 2-2. 江戸時代御花畑御絵図※2

図 2-3. 花畑屋敷全景



図 2-4. 参勤交代迎え仕度(花畑邸前)※3

※1 能舞台は現在のみずほ銀行熊本支店あたりと考えられる

※2 熊本本市史 別編 第一巻

※3 御入国・御行列図(永青文庫 所蔵)



ようしゅんていなかのず  
図 2-5. 陽春庭中之圖(花畑屋敷を南より見る)<sup>※1</sup>



図 2-6. 陽春庭中之圖(花畑屋敷を北より見る)<sup>※1</sup>

※1 永青文庫所蔵

## ②明治期以降

### 花畑屋敷跡地周辺の発展

花畑屋敷周辺は江戸期には上中級家臣の住む主要な侍町でしたが、明治4年に鎮西鎮台が置かれ、大正13年に連隊が移転されるまで練兵場・兵営として利用されました。天皇の行幸(視察)先ともなり、これを記念して周囲の道路や橋などの基盤整備が行われました。

また、明治初期にはジェーンズを教師とする熊本洋学校が熊本城内(現熊本県立第一高等学校)に創立され、多数の有為な人材(浮田和民、徳富蘇峰、横井時敬など)を輩出しました。

大正13年の三大事業は「連隊移転」のほかに「上水道施設の整備」「市営電車の開通」があり、それぞれが熊本市の近代都市化につながりました。また、昭和初期には新市街に百貨店の新設や市電の拡張整備がなされ、熊本市の業務・商業中心地として発展しました。(図2-7)

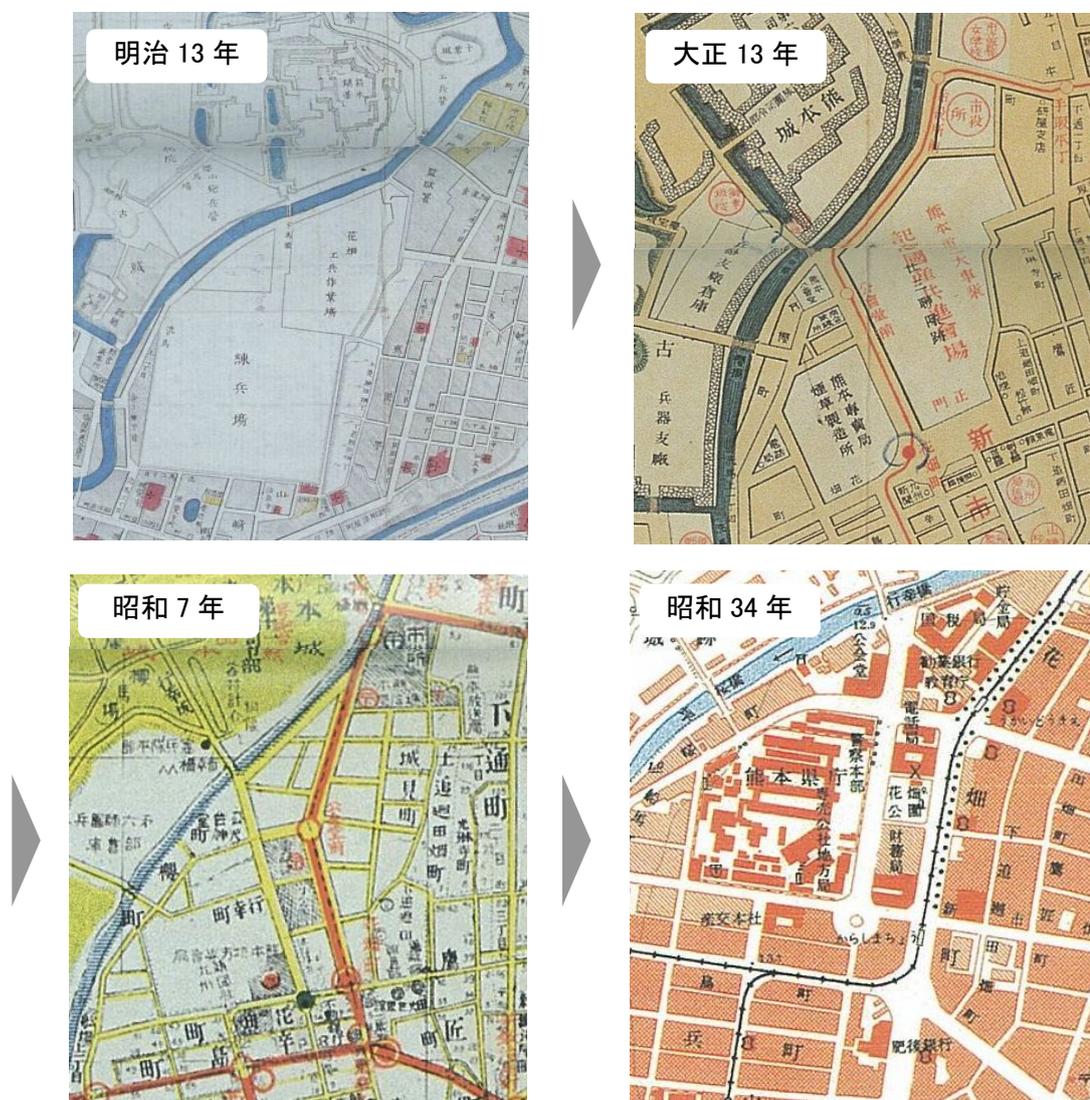


図2-7. 市街地の変遷※1

※1 出典:熊本本市史 別編 第一巻

## 市民のハレの場として利用

西南戦争の戦火から一度復興した市街地は第二次大戦により再び焦土と化すものの力強く復興し、花畑町周辺はその後東京五輪聖火イベント、展示会場など市民にとってのハレの場として利用されてきました。(写真 2-8、9)



写真 2-8. 東京五輪聖火イベント※<sup>1</sup>  
(昭和 36 年)



写真 2-9. 明治天皇<sup>ぎょうこう</sup>行幸にちなんで名づけられた<sup>みゆきばし</sup>行幸橋※<sup>1</sup>(昭和 34 年)

---

※<sup>1</sup> 出典:熊本日日新聞

### ③花畑・辛島両公園の変遷

#### 花畑公園

花畑公園は昭和 4 年に都心に自然景観を演出する目的で整備されました。花畑屋敷が整備される以前に鎮座していた代継神社<sup>※1</sup>の頃から残るといふ大楠がそのまま残され、公園内でテレビ観覧や火の国まつり行事が行われるなど、市民の集いの場として親しまれてきました。(写真 2-10,11)



写真 2-10. 花畑公園内  
テレビ観覧<sup>※2</sup>(昭和 39 年)



写真 2-11. 花畑公園内で行われた  
火の国まつり行事<sup>※2</sup>(昭和 40 年)

#### 辛島公園

辛島公園は大正期の市電開通時は宅地やロータリーとなっていました。昭和 33 年戦災復興計画により都市計画公園として整備されました。地下水都市を象徴する噴水のある市民の憩いの場となっていました。(写真 2-12,13)



写真 2-12. 辛島公園内のサー  
カス公演<sup>※2</sup>  
(昭和 34 年)



写真 2-13. 辛島公園の噴水<sup>※2</sup>  
(昭和 37 年)

※1 代継神社の名前の由来は、<sup>きのものぶ</sup>応和元年(961年)に国司・紀師信が赴任の際、茶臼山南麓(現花畑公園)に国の守護神として祀り、敷地の四隅に大木を植えて「四木宮」と称したのに端を発する。江戸期に至っても信仰の対象とされたが、慶安 3 年(1650 年)、藩主・細川光尚の長男・綱利が幼少にして領地を受け継ぐことが出来たので、これを神徳の加護によるものとして「代継宮」と改称したとされる。

(参考: <http://www.yotsugiguu.jp/gosaishin.html>)

※2 出典:熊本日日新聞